歴史小説の問題

大岡昇平

文藝春秋

歴史小説の問題
昭和四九年八月一〇日　第一刷
著者　大岡昇平
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一二一一一
振替口座　東京七八七四三番
本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函
万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します
© Shohei Ooka 1974 Printed in Japan

目次

I

歴史小説の問題　9

II

「蒼き狼」は歴史小説か　45

成吉思汗の秘密　64

叙事詩的錯誤について　94

英雄の諸形態　110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

III

歴史小説の発生　125
日本の歴史小説　139
歴史小説の美学　152
歴史其儘と歴史離れ　164
江馬修「山の民」　177
現代史としての歴史小説　196
あとがき　210

歴史小説の問題

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

歴史小説の問題

1

私が井上靖氏の歴史小説「蒼き狼」について作者と論争したのは、一九六一年一月で、十三年前のことであるが、その後、歴史に対する一般の関心は、殆ど切れ目なく続いている。このところまた各種の「日本の歴史」シリーズが出版され、ブーム現象を呈している。NHKが三年前からはじめた「日本史探訪」は視聴率が高く、その内容をグラフィックに編集した角川書店のシリーズが、予想外の売行を示した。

司馬遼太郎氏「坂の上の雲」(一九六九―七一年)が超ベストセラーになり、昨年は勝海舟全集が二種類も出た。古代史、特に邪馬台国の位置について松本清張氏その他による推理があり、法隆寺建立の秘密に関する梅原猛氏「隠された十字架」、柿本人麿刑死説「水底の歌」などが、それぞれよく読まれている。高松塚発見をめぐる解釈合戦についてはいうまでもない。

そして今年の「展望」二月―四月号にわたって、歴史学者菊地昌典氏が「歴史小説とは何か」を連載した。氏は井上氏と私の古い論争に触れ、鷗外その他の明治大正の歴史小説を検討し、現在の司馬＝松本の歴史小説流行の原因を考えている。

井上氏と私との論争の焦点は、歴史小説の中の、史実の変更の許容度を中心としたものであったが、その頃の歴史家は歴史小説に実に寛大であって、小説はまず面白ければよい、史実の変更は随意である、という態度であった。当時高柳光寿氏の「本能寺の変・山崎の戦」（一九五八年）があった。これは明智光秀の裏切りが信長に対する怨恨によるものではなく、天下取りの野心と見通しを持ったものであったことを、当時の戦国大名の支配と地下の土豪との関係から、実証したものであった。しかしこの労作の出版は、まもなく福田恒存氏が裏切りは秀吉との馴れ合いの下に行なわれた、という戯曲「明智光秀」を書くのに、何の妨げにもならなかった。

菊地氏のような専門家が正面から歴史小説を論じたのは、一九五四年に服部之聰が「夜明け前」を批判した「青山半蔵」以来ではないだろうか。これは平田国学の研究に基き、藤村が家蔵の古文書を見る機会がありながら、それを全く解読していないことを指摘したものであった。菊地氏は、歴史学者が現在のブーム現象に乗って出版される歴史小説や史伝を、積極的に批判すべきであるといい、また、あるべき歴史小説の形を示唆している。

ところが今月の文芸雑誌にはこの長い力作論文について論じた論文は、一つも見当らない。私

の眼に触れたのは、朝日新聞三月二十八日付鶴見俊輔氏の「論壇時評」、「民主文学」五月号の田村栄氏の「文芸時評」及び「日本読書新聞」四月八日付「文芸時評」で蓮実重彦氏が触れているだけである。別に恐らく菊地論文とは関連なく書かれた柄谷行人氏「歴史と自然—鷗外の歴史小説」(「新潮」三月号)がある。

いくつかの理由が考えられる。第一は現在の文壇には菊地氏が考えるような意味で、歴史小説の問題は存在しないということである。少し前に杉浦明平氏「小説渡辺崋山」(一九七一年)、辻邦生氏「背教者ユリアヌス」(一九七二年)があったが、出版直後、書評的に論じられただけで、継続的な問題とはならなかった。

私自身井上氏との論争の後、一九六三—六四年に「文學界」で継続的に東西の歴史小説について考えてみたが、結論を得るに到らなかった。この間、井上靖氏は歴史小説を書き続ける。「風濤」(一九六三年)、「おろしや国酔夢譚」(一九六六—六八年)、「後白河院」(一九七二年)などは、「蒼き狼」についての私への反論で否定した「史実性」がむしろ忠実で、「歴史離れ」の自由の原則からは遠いものであった。その点、むしろ自由な人物の肉付けを行なっているのは、それまで渡辺崋山について史伝的な短篇を発表していた杉浦氏の集大成的大作においてであった(杉浦氏はその作品を特に「小説」と指定した)。

辻邦生氏は「背教者ユリアヌス」完成後、遠藤周作氏との対談「歴史と現代文学」(「文學界」一

九七二年二月号）で「現代のパロディとして、あの時代に投影させた」といっている。「背教者ユリアヌス」は五世紀のキリスト教化したローマ帝国に、ギリシャの神々を復活させようとした知識人的皇帝の生涯を書いたものである。これは前世紀末のメレジコフスキーの「神々の死」以来の西欧人によって屢々取り上げられる主題だが、そこにある社会的諸条件は、むろん近代以前のものである。辻氏は二つの世界観の間に引き裂かれる人間を描くことによって「現代のコントル・ポア（対応物）を設ける」といっている。遠藤氏にも「沈黙」以来のキリシタン物の近作「死海のほとり」があるが、氏は一貫してキリスト教の教義と棄教の関係を追及している作家であり、「むしろ内在的なモラーリッシュな主題があって、それがいろんな歴史的素材を呼び起してくる」という。これは作者の予め持つテーマを書くために、歴史的衣装をかりるだけだ、とした大正の菊池寛、芥川龍之介の立場に戻ったものである。辻氏は小説の技巧として芥川のように贋の文献をさし挿んだことをむしろ誇っている。

ここには井上氏と私との間に争点となったような事実と小説の間についての問題意識はない。菊地昌典氏の注意が、日露戦争や二・二六事件など、われわれにより近い過去を扱っていて、それだけに史実の問題が存在する「坂の上の雲」や、松本清張氏の「昭和史発掘」に集中したのは当然といえる。そして氏の「月刊エコノミスト」一月号所載論文「司馬遼太郎と松本清張の世界」及び近著「一九三〇年代論」（田畑書店）に収められた司馬＝松本批判を読めば、氏の問題意識は

ほぼ察せられる。

今日「坂の上の雲」を耽読する「庶民」が、一九三〇年代に吉川英治の「宮本武蔵」を読みながら日本のファッショ化に追随した「国民」と同じ道を辿るのではないか、との危惧があるようである。

「庶民」とはあいまい概念で、マルクス主義陣営では評判の悪いカテゴリーである(「民主文学」で田村栄氏が、この概念に疑問符をつけたのは当然である)。菊地氏はこの言葉を「国民」「民衆」「大衆」よりも適切と認めて使ったという。一九三〇年代にはマルクス主義者のいうプロレタリアの「階級意識」が弾圧に会って消滅し、吉川英治に「大智識」とおだてられ、その小説的技巧によって、容易に戦争謳歌に誘導される「庶民」に変った。「大衆」について似たような表象を、多数の読者を相手とする司馬氏と松本氏が持っていることを、彼等の座談会などの言葉から推定している。

菊地氏は司馬氏の視角を俯角的、松本氏のそれを水平的であるとする。前者は対象との距離が遠くなるほど鳥瞰的になって、快適な見晴らしの幻想を与える。後者では自己の立場を下積みにされた「庶民」に限定しながら、現代世界を水平に探求するため、歴史的時間が凍結しているという。共に「庶民的」な角度であるが、この観点からは歴史上の人物は現代人に換算されて現われる。こういう「庶民」は一九三〇年代に沈黙して戦争に協力しただけでなく、今日同じ沈黙によってソルジェニーツィン事件、金大中事件を、権力者の欲するままに進行させた、と菊地氏は

指摘する。

歴史上の人物は、その時代の条件の中に生きていなければならない、それは歴史小説というジャンルが要求するだけではなく、歴史をそのようにあるがままに捉えることを忘れることは現代をも誤って捉えることになる。司馬＝松本のベストセラーによって誤って表象されている庶民の実体を描き出すことに、現代の歴史小説の任務があるのではないか、というところまで、菊地氏の論旨は進む。

これは文学よりは、社会科学の立場で、司馬＝松本の流行だけに関わるものではない。家永教科書裁判の経過に見られるように、教育の分野における歴史の書き直し、それに呼応して御用文化人によって偽史、偽伝が書き進められている現状において、極めて適切な指摘であると思われる。菊地氏の論文が「文芸時評」よりも、鶴見氏の「論壇時評」でより詳細に取り上げられたのも故なしとしない。鶴見氏の所見については、あとで触れる機会があるが、私としては菊地氏の所論が、文学上の問題として現代文学とどうかかわるか、その点を探すことからはじめなければならない。

2

菊地氏は鷗外の史伝や「寿阿弥の手紙」、長谷川伸「相楽総三とその同志」（一九四三年）や遺作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com